よなべ

YONABE

夜鍋二号

Kentarou Imada
Takaya Kobayashi
Yuna Hagiwara
Syuko Kudoh
Taishu Iizuka
Ryuhei otake
Risa Tsuruta
Satomi Takazawa

and Team YAEI

Vol.2

WORK at NIGHT

よ な べ ＝ チーム夜営メンバーが夜な夜な仕上げた仕事のこった煮。

小林峻也 「KKYB」 P.5-6

萩原優奈 「終末のひばり」 P.7-8

工藤愁子 「フライデーナイト」 P.11-16

飯塚大周 「OMIYAGE MUSIC!!」 P.19-22

大竹竜平 「☒を失くして。」 P.23-26

鶴田理紗 「イタコごめん」 P.29-36

高澤聡美 「so fine」 P.37-38

レコメンド 「東京」 P.41-42

今田健太郎（トリコロールケーキ）「にじんだページ/袋田くん/ヒロ子の広い空/指先４章/ミステリー小説」 P.3-4, 9-10, 17-18, 27-28, 39-40

YONABE Vol.2

表紙・目次イラスト / 大竹竜平
企画編集 / チーム夜営
デザイン / 大竹竜平
発行日 /2018.6.30
発行 / チーム夜営
teamyaei.com
teamyaei2014@gmail.com

にじんだページ

今田 健太郎

女にとって、数えきれないほど訪れた図書館だった。
男にとって、たまたま立ち寄っただけの図書館だった。
女は古い恋愛小説をめくりながら、愛用の美しく光る薄い金属製のしおりを弄んでいた。
「綺麗ですね」
「え？　ああ、しおり」
「いや、指」
女はすぐに恋に落ちた。それまでに女が読んだ、どんな恋愛小説よりもすぐに。
ある日、女はスープを作った。男が好物だと言った、ベーコンとブロッコリーのスープ。
「おいしい」
そう言って男は微笑んだ。
女はふと、その光景にしおりを挟んだことがあるような気がした。男が浮かべた優しい微笑みを、窓辺から差し込む陽の光を、文字で読んだことがあるような気がした。最後に図書館に行ったのはいつだったろう。
そういえば、あのしおりもしばらく見ていない。
突然の終わりは、女に予期できるはずもなかった。
女にとって物語は、いつもゆるやかに終わっていくものだった。残り少なくなっていくページを、徐々に削られていくその厚みを、指先で感じていくものだった。
部屋じゅうに、スープの香りが漂っていた。
女は読みかけの本を手に取り、読みはじめた。
途中、電話がかかってきたので、余っていたベーコンをページに挟み、出た。

illustration by fumiko koshiba

小林峻也（K）のケバブ（K）食べ歩きへようこそ in（Y）Berlin（B）

takayainberlin.blog.fc2.com

ここは、2016年10月からベルリン在住の舞台美術家である筆者が当地で観劇した演劇作品の感想を語っていくコーナーです。日ごとに様々な劇場に出向いては、帰り道にそこいらで買ったケバブを食りながら脳裏にめぐらせた感想文とお考え下さい。なお作品解釈などは完全に私見に基づいたものである旨、ご了承下さい。

2018年4月6日から22日までの間、クーダムの劇場シャウビューネでは『FIND Festival』が開催されています。フェスティバルのタイトルは『Festival International neue Dramatik』を縮めたもの。その名からわかる通り、国際的に活躍する新たな演出家とそのカンパニーの数々を招待する演劇フェスティバルです。ベルリンに滞在することの大きなメリットの一つはこのような国際的フェスティバルが多いことかもしれません。特に演劇やダンスの世界で、ベルリンはヨーロッパを中心に多くのアーティストや作品が集まる磁石のような都市になっています。

今回はフェスティバルの参加作品の中から、ブエノスアイレス出身の演出家 Rodrigo García の作・演出作品『Evel Knievel contra Macbeth na terra do finado Humberto』を見てきました。

この作品は現代のポップカルチャーや大衆文化を強く彷彿とさせる要素を、視覚的に前面に押し出しながら、それをいわば「縦糸」として、その間に複雑にリンクする様々な題材が「緯糸」として織り込まれた叙事詩的な作品でした。強烈にシニカルでありながら信じられないほどユーモラスで娯楽的、かつダンスやパフォーマンスの要素もふんだんに取り込まれた様が非常に独特で、ドイツの演劇界隈では異彩を放つ存在感を持っています。

ポップとはいわば、絶え間ない刺激を求める資本主義社会がみずからのために生み出した衣。だとしたらその衣の内側には、本当は何が隠れているのだろう？そして、メディアによって運ばれる「興奮剤」のような刺激にあえぐことをやめない現代の世界は、この先、私たちをどんなところに導いていくのだろう？

テキストの中心的な素材となっているのはアメリカの俳優兼映画監督 Orson Welles（彼の映画で自信が主演している『マクベス』が作品の重要な下敷きです）と、同じくアメリカのバイク・スタントマン Evel Knievel です。そして日本のウルトラマンに登場する怪獣のネロンガ…。

マクベス役に没頭するあまり自分の存在を忘れてしまう Orson Welles はギリシャの哲学者デモステネスとリュシアスの助けをかりて自分の根源を消そうと試みる。しかし彼は、Evel Knievel とネロンガ、そしてフィリップ・スタルクがデザインしたミニクーパーの霊柩車のことを考えにいれることを忘れてしまう。ネロンガはブラジルのサルバドールから東京に向かうエコノミークラスの機内で始終フライトアテンダントに痴漢をしかけながらソフトドリンクを飲んでいる。そしてそこに織り込まれたブラジル独立戦争の記憶。Rodrigo García のテキストは、まさに複雑なパターンを持つ織物（Textstel）のようです。舞台上の衣装や小道具、映像表現に現れるビビットな色彩は、まさにテキストが織りなす複雑な事象の絡み合いを視覚化した、叙事詩としての織物の表層。目に突き刺さるような鮮やかな色彩に、繊細な模様、そして、ざらりとした肌触り。

舞台上の俳優は三人。始めに登場する二人はどちらも若い女性。彼女らは、冒頭に東京の街をうろつくネロンガの３D映像が5分ほど流れた後、蛍光色のスプレーでペイントされた甲冑を不完全に装着して会場いっぱいに金属音を響かせながら登場した後、分厚いサングラスに黒のパーカ、黒のスウェット、さらに異常にそこの分厚いスニーカーという姿に衣装替えします。彼女たちはスペイン語と英語のセリフをそれぞれが担当する形です。怪獣ネロンガ（姿はデフォルメされている）は、映像の後すぐにむちむちの縫いぐるみの姿で登場します。

東京行きのエコノミークラスのシーンは、飛行機の窓の書き割りと実際の飛行機の座席でできたセットに縫いぐるみが座って演じられ、舞台に登場した縫いぐるみの頭をはずすと、中から可愛らしい少年が出てきて客席から幸せなため息がもれる。この少年は木琴奏者でもあり、終始フランス語でテキストを語ります。

テキストの他言語による読み上げと、若者っぽいゆるさと子供のじゃれあいを思わせるような身体表現がミックスされた演出の中に、Orson Welles の白黒映画『マクベス』や、Knievel のバイクスタントなどのアーカイブ映像、彩度の強い３D のモーショングラフィックなどが舞台上のスクリーンに投影されていく様は、まさにポップの衣をまとった叙事詩といった様相。フィリップ・スタルクデザインの霊柩ミニクーパー（もちろん架空）は本当に醜いビジュアルでキッチュな３D 映像に登場し、現代の流行や広告産業に対する強烈な皮肉としてかなり効いていました。

後半で印象的だったシーンは、照明が落ちた舞台に女優の一人が裸で登場し、もう一人の女優が彼女に向かって、鮮やかな蛍光グリーンの絵の具が充填された消火器を噴射し、絵の具まみれの身体が舞台上でのたうちまわるという場面でした。その直後、もう一本の消火器が持ち出され、そこからは血を思わせる真っ赤な絵の具が吹き出して同じく女優の身体に浴びせられます。強い色彩のコントラストにまみれて舞台上であえぐ身体の様子は、それまでのポップな表現と好対照をなしてドラマトゥルギー上の大きな「転換」を演出しています。そしてそれは、終わりなく押し寄せる情報の波の中で、行き場を失ってさまよう人間の姿を表現しているように見えました。

シーンを同じくして、舞台上にはバイクスタントの失敗の映像が投影されます。ジャンプ台を勢い良く飛び出した数秒後、バランスを失ったドライバーの身体がバイクから投げ出され、地面に叩きつけられ、勢いの止まらないバイクの下敷きになりながら斜面を転がり落ちる。絵の具のシーンと相まって、人間の欲望や終わりない刺激を求める心理がいきつく姿を彷彿とさせます。

外国で暮らしていると、ポップカルチャーの代名詞としての「日本」のイメージにあらためて出会うことが良くあります。外国語で発音される「Tokyo」という語感が持つカラリとした響き、そこから人々が瞬時に抱くマンガやアニメ、ファッションなどのカルチャー、ネオン広告に溢れた高層ビル街の風景などの連想にも、だんだん慣れてきます。

自身が育った街としての東京といわゆる「Tokyo」の間に、歴然としたイメージの断絶があることも感じます。その断絶によって、まるで自分が育ったその都市が、世界のどこにもない場所であるかのように思える瞬間さえあります。この作品からも強く感じ取れる、いわゆるポップカルチャーが具現化された仮想空間のような「日本」や「東京」は、まさにそのような「どこにもない場所」のイメージに一致するものかもしれません。

当然ながら日本人である私たちにとって、東京は仮想空間ではないし、ポップカルチャーの代名詞としての都市でも（政府観光局がどのようなイメージを打ち出しているか知りませんが）ありません。でもシェイクスピアのマクベスに独自の視点から大きな風穴をあけて、現代の世界への皮肉な叙事詩として提示される『Evel Knievel contra Macbeth na terra do finado Humberto』は、新たな情報や刺激に溢れ、都市の隅々まで張り巡らせられたメディアのネットワークにその表層を奪われた街を、日夜なんの気無しに生活する私たちに、「本当のところ、そこには何があるのか？」という重要な問いを投げかけているように思えます。

ベルリンの劇場探索は、今後もまだまだ続きます。

KKYB

FIND Festival @Schaubühne
2018/04/07
Evel Knievel contra Macbeth na terra do finado Humberto
Rodrigo García



終末のひばり

Yuna Hagiwara

あるゲームプログラマーが自殺をしようと決めてから、それまでの日々を書き綴ったブログがあって、それによると彼が死ぬ前に最後に食べたものはガストのチーズINハンバーグだった、という話を聞いたことがある。

人生の最後の晩餐がガストのチーズINハンバーグか、とその事実（かどうかは分からないけど）をひとつひとつ噛み締める。

たまにセールをやっていることもあるから、その時に食べていたなら399円だ。

ガストのハンバーグは安いのにクオリティが高くておいしい。けど、399円の食事で、死ぬ前の胃を満たすのか。

自分だったら死ぬ前に何を食べたいかな、と思う。

そう聞かれたら、高級店に行ってお金のことを気にせずお腹いっぱい食べるとか、食べたことのない珍味を食べてみるとか答える人は多いだろうし、または思い出のお袋の味を最後に、なんて人もいるだろう。

上記のガストの話はネットで見聞きした話だが、それについて紹介していた人は、「その人はプログラミングの仕事の過酷さで我を忘れてしまい自殺したようだが、最後にいいものを食べる、といった発想ができない状態だったのではないかと思う。忙殺されたあげく、最後まで俟しい発想しかできなかったための、ガストという選択ではないか」と考察していた。確かにそれもあるかもしれないが、私自身はあまり腑に落ちないでいる。

思うに、その人の「人生の落とし所」がガストだったのではないかなと私は思っている。

これは完全に私の想像になるが、多分その人にとって、ガストはちょうどいい、ぬるま湯のような場所だったんじゃないか。

高級店に行けば肩が凝って疲れる。珍味に挑戦する体力もない。お袋の味も、これから自殺するにあたって大きな重しのように感じられる。

たぶんこの人は、チーズINハンバーグがそこまで大好物だったわけでもない。

最期に向けて、気負わず落ち着いて食事が採れる場所が、その人にとってガストだったのではないか。

私もよくガストに行く。

何も食べたくない、何もしたくない、でもとりあえずお腹は空いていて、今は中途半端に夜で、お金ないけど一人で入れて、自分が気にされない、背景のようになれる場所。と探していると、ビルの隙間から煌々と赤い看板に見慣れた白い三文字が目に入る。

もう歩きたくない。ここでいいか、ここがいいな。ガスト。すかいらーくグループの大黒柱的な存在だ。

ガストの席に着くといつも安心する。また来てしまったなあと呵責もある。

でもそこで頼むのは期間限定のちょっとお高い贅沢メニューでは決してない。

基本で無難で、一番味が安定しているものを頼むのは、心が傷つかない、ザワつかない、安全策だ。

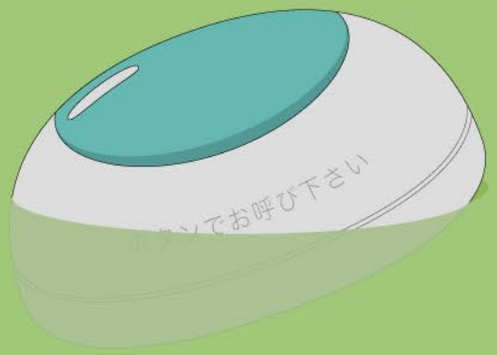
自分の最期が、波風の立たない、優しい航海で終わりますように。静かな祈りを、いつも食べているチーズINハンバーグに込める。いつもの味。大丈夫。大丈夫。心は静かだ。

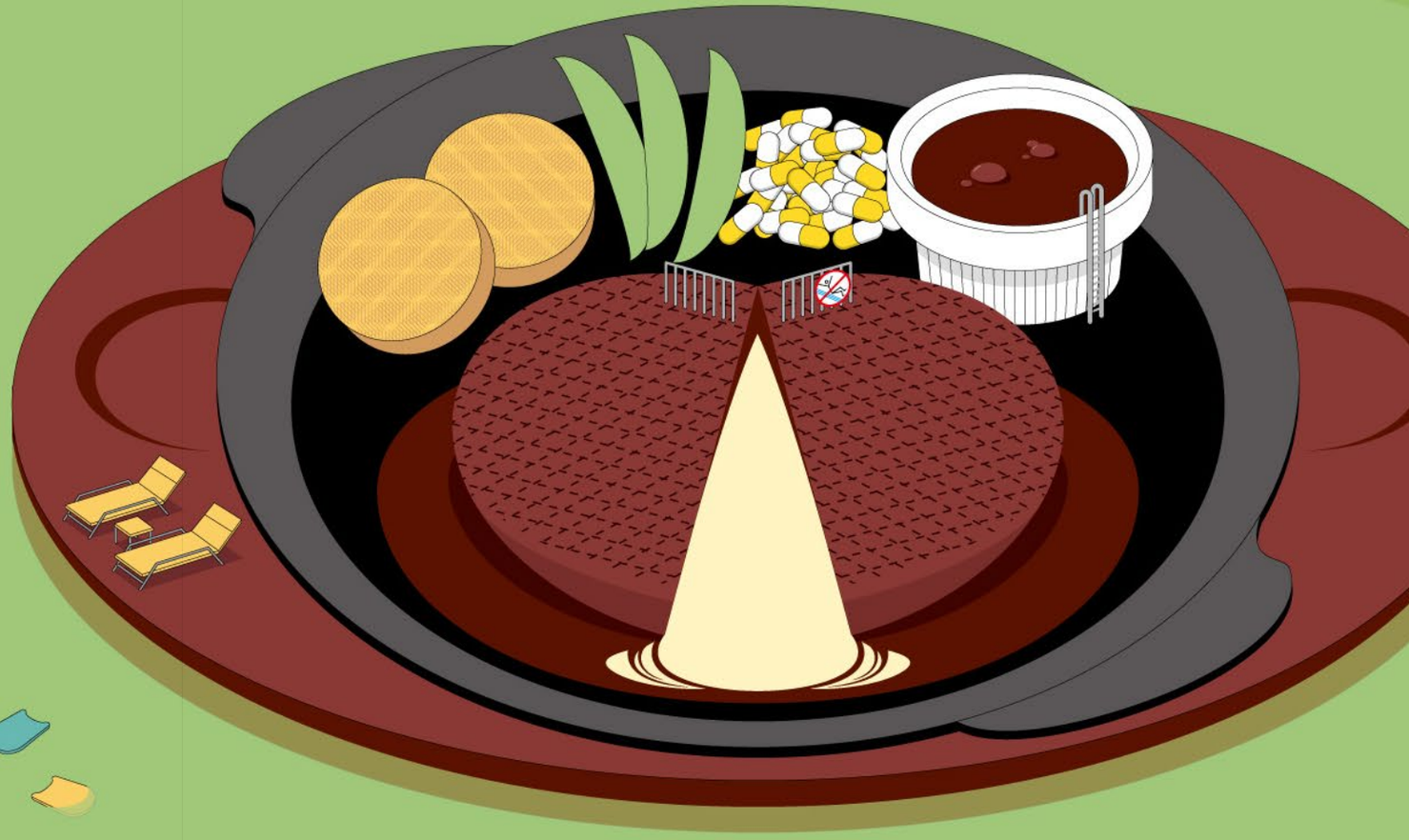
割ったハンバーグからチーズがゆっくりと垂れる。あたたかくてきれいな、クリーム色だ。

勝手に他人の死のいきさつを想像してしまうのは良くないことだと思うけれど、私はたまにそのプログラマーのことについて考える。ガストで最後の晩餐をするのは、分からないことでは全くない。

私は、最後に何を食べてから死ぬのだろう。

くれぐれも最後の食事を採るとき、いつもアプリでせこせこと利用しているファミレスの割引を使わないようにしたい。宵越しの金とクーポンは持たないのだ。





袋田くん

今田 健太郎

なごやかな昼休みをひとつの悲鳴が切り裂いた。

「見て！」

袋田くんが青いギンガムチェックの袋を手にしていた。途端、巾着状の袋の口がしゅるりと緩められ、それと反作用の関係にあるかのごとく、教室全体がきゅっと緊張する。

そうして袋田くんは袋から取り出した。

《二段重ねの弁当箱》を。

なんだ、ただの弁当袋じゃないか。と、ほかのクラスメイトたち同様、僕もほっと胸をなでおろした、のも束の間だった。

袋田くんの手に、今度は赤くて細長い袋があった。

「おい、今度は赤くて細長いぞ！」

男子生徒の叫びで教室全体がパニックに陥る。天を仰いで十字を切る者。8階の窓枠に足をかけ、いまにも飛び降りんとする者。「いままでありがとう」と親に別れの電話をかける者。みなの絶望をよそに、袋田くんがファスナータイプの袋の口に手を伸ばしていく。終わりだ。なにもかも終わりだ。ぶじゃっ、と忌まわしい音とともにファスナーを開けると、袋田くんは取り出した。

《漆塗りのお箸》を。

「お箸袋だ……よかった、みんな、お箸袋だよ」

目に涙を溜めた委員長に、数人の女子生徒が駆け寄る。長い沈黙。と、彼なりにその現状を打開しようとしたのだろう、お調子者のY田が委員長の様子を真似ておどけてみせた。

「みんな～、お箸袋だよ～」

ばん、と笑いが弾けた。委員長が笑った。みんなが笑った。僕もY田を指差し、腹を抱えて笑った。僕たちの望む、いつもの昼休みが戻ってきたのだ。

「もう、やめてよY田くん！　あたしそんな言い方……」

そこまで言いかけた委員長が、一点を見据えて固まった。嘘だ。そんなはずない。笑顔を引きつらせたクラスメイトたちが、ひとり、またひとりと委員長の視線を追う。

袋田くんが、ピンポン球ほどの小さな紫色の袋を手に、誰よりも楽しそうに笑っていた。

もう叫ぶひますらなかった。次の瞬間、袋田くんの手が袋の口にかかる。ばりりり、と不吉な音を立ててマジックテープがはがされる。

女子生徒たちが顔を覆う。誰もが目をそむける。おどけていたY田が8階の窓の外へ飛び降りる。

そうして袋田くんはつまみ出した。

《魚の形の小さな醤油さし》を。

「よかった、醤油さし袋だ……」

そう言い残し、委員長が失神した。保健委員たちがあわてて介抱に走る一方で、袋田くんは、なにごともなかったかのように微笑みながら、弁当のアジフライに醤油を垂らしている。ぽた、ぽた、と落ちるその雫は、僕たちが流したい、けれど流すところではない、涙の粒のように見えた。

がたん、と大きな音とともに、教室の隅で、不良のM岡が椅子を蹴り上げた。

「なんで俺たちがこんな思いしなきゃいけねえんだ！」

M岡は一直線に袋田くんに掴みかかり、拳を振り上げた。直後、がどん、とまた大きな音とともに、なぜかM岡のほうが崩れ落ちた。腰が抜けた様子だった。その理由はすぐにわかった。

袋田くんの手に、迷彩柄のがまぐち袋があったのだ。

べつん、と袋が開き、漆黒の闇が覗いた。

闇は暗く、どこまでも暗く、視線すら飲み込まれそうで、もはや息をするのがやっとで、残酷に、ただ残酷にすべての希望が奪われていくように、苦しさだけが目の前を覆い潰し、わずかに残された視界の端で、いま、赤子の寝顔にも似た、とてつもない充足を覚えたような表情で、袋田くんが闇の中に、使い終えた醤油さしを入れたということは、それは、

《使い終えた醤油さしを入れる袋》だ。

「なんでわたしたちが、こんな思いを……」

倒れたままの委員長がうなされるようにつぶやく。

どこからか、誰かのすすり泣く声が聞こえた。

本当に、なんで僕たちがこんな思いをしなくちゃいけないんだろう。いつからだろう。どうしてだろう。僕たちは、袋田くん（本名・斉藤）の袋からなにが出てくると思っているんだろう。

チャイムの音が昼休みの終わりを告げたが、誰もがなにも終わっていないと感じた。

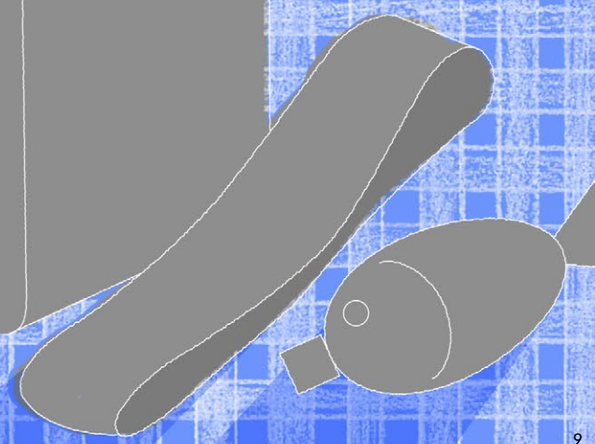
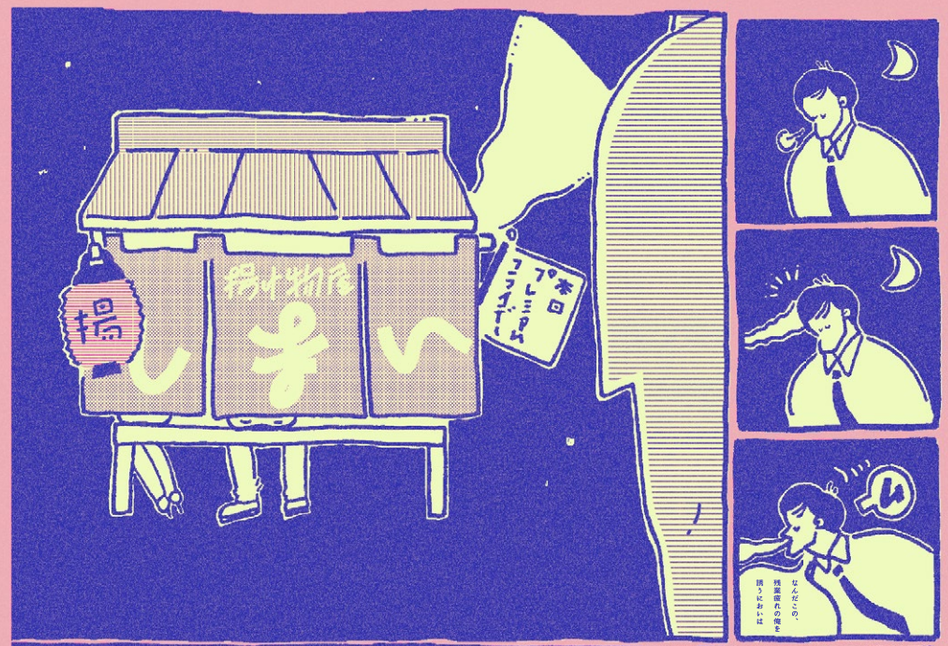


illustration by fumiko kosuba

揚げ物屋「まいの」

フライデーナイト

作・くどうしゅうこ







…あの、あれ、間違ってません？

今日別に、月末でもないし、ましてや金曜日ですらないですよ。何故、「プレミアムフライデー」なんですか？

木日 プレミアムなフライデー ¥300。

？間違ってなんかないわ

木日 プレミアムなフライデー ¥300。

うちのプレミアムフライデーは、あの個人消費換起キャンペーンとは全く無関係なの。

うちのはね、「特別に揚げる日」よ。

私たち姉妹の気まぐれで実施するもんだから月曜日だろうが木曜日だろうが関係ないの。

毎日生きているとさ、疲れちゃったりするでしょう？道端でわんわん泣きたくなったり、するじゃない。でもこのご時世、それをするにも一苦労なもんだから、この日だけは特別に頑張っちゃう人のモヤモヤした気持ちを揚げてあげるの。３００エンでね。

私も揚げてもらったわ。

5年付き合ってた彼氏に振られた日に届いた、友人の結婚報告の連絡。良い揚がり具合だったわ。

俺はねえ、

大阪出張で金曜日にナンパした生粋の関西生まれの女に、二軒目どうするって聞いたら「探偵ナイトスクープ、リアルタイムで観るから帰る。」って言われた日の気持ちを。

どうしても理由が納得いかなかったもんで…

いやまあ、その件は、ねえ、仕方ないとも思うけどねえ…

何故です？

何故ってそりゃあ、関西人にとってリアルタイムでナイトスクープを観る事はいくつになってもやめられない事なのよ…。

そうよ、止まらないのよ

かっぱえびせんよ

どうします？お兄さんも、揚げてく？

モヤッ

揚げて、どうにかなるんですか？

どうもならないわ

どうにもならない事は、どうしたってどうにもできっこないわ。頑張ってモヤモヤし続けるだけよ、ずうっと、ずうっと、

忘れるまでね

でもそれってすっごく邪魔でしょう？いい夜には。

だもんで

そのモヤモヤを、

カラッと揚げてさ、

レモンでもぶっかけて、

さっぱりサクッと食べちゃって、夜に溶けましょ。

コト

ソレ、さっきのお兄さんのモヤね。

サービスよ

…サクッ

…、

なるほど。

また次もいらしてよ、

揚げちゃいたい、夜に。

ヒロ子の広い空

今田 健太郎

午前3時。目覚まし時計を叩くように止め、ヒロ子の朝がはじまる。「あーあ。週に1度くらいお休みがあってもいいのに」髪の毛をモンゴルママに教えてもらった「4つ編み」にしながら1人言をつぶやくと、まるで自分が59歳のベテラン厨房員のように思えてきた。はぁりとタオルの扉布を開けると、向こうの草原に2653頭のヒツジがいた。「むぅ」という声とともにヒロ子は座布団のようにふくらんだ。「ムーニ　ヒロ」逃げ出した5頭を数えるのが日課。本当にそんなにたくさんのヒツジがいるのかな？　8かける9を「79」と答えてもおかしくない年。つまり、いくら大人ぶってもヒロ子はまだ3歳の女の子だ。たしかに2歳よりは大きいかもしれない。けれどまだ3歳だ。だからヒロ子にはヒツジの数はいつもよくわからない。8方塞がり。4回連敗。そんな言葉だってヒロ子は知らないだろう。ヒロ子の眉毛がときどき8の字にすねていく。そのときだった「ムーニ　ヒロ」逃げ出した5頭を数えるように4人の凸ムと6人の奴隷を連れた男・アジェリが現れた。見た目は2枚目だが、都会でニンテンドー64を市価の3倍で売っているらしいアジェリは、ヒロ子のモンゴルでのホームステイ先の3男で、戸籍の見方を変えれば8男とのことだった。という抵抗のつもりだったのだが、なにを勘違いしたのか、それを見たアジェリはモンゴルのトップスターであるスィムーリ・ハンの得意技「7度見」を施しかえした。88ヶ所巡礼――むろん4国のそれだ――を行う1人の女性がいた。「あーあ。971ヶ所巡礼くらいあっても全然いいのに」約69パーセントの参加者がやさしい魂胆なしで参加し、そして見事その旅を果たした。ヒロ子の眉毛、御年99歳のヒツジ、その人である。（以下、ほぼ永遠につづく）

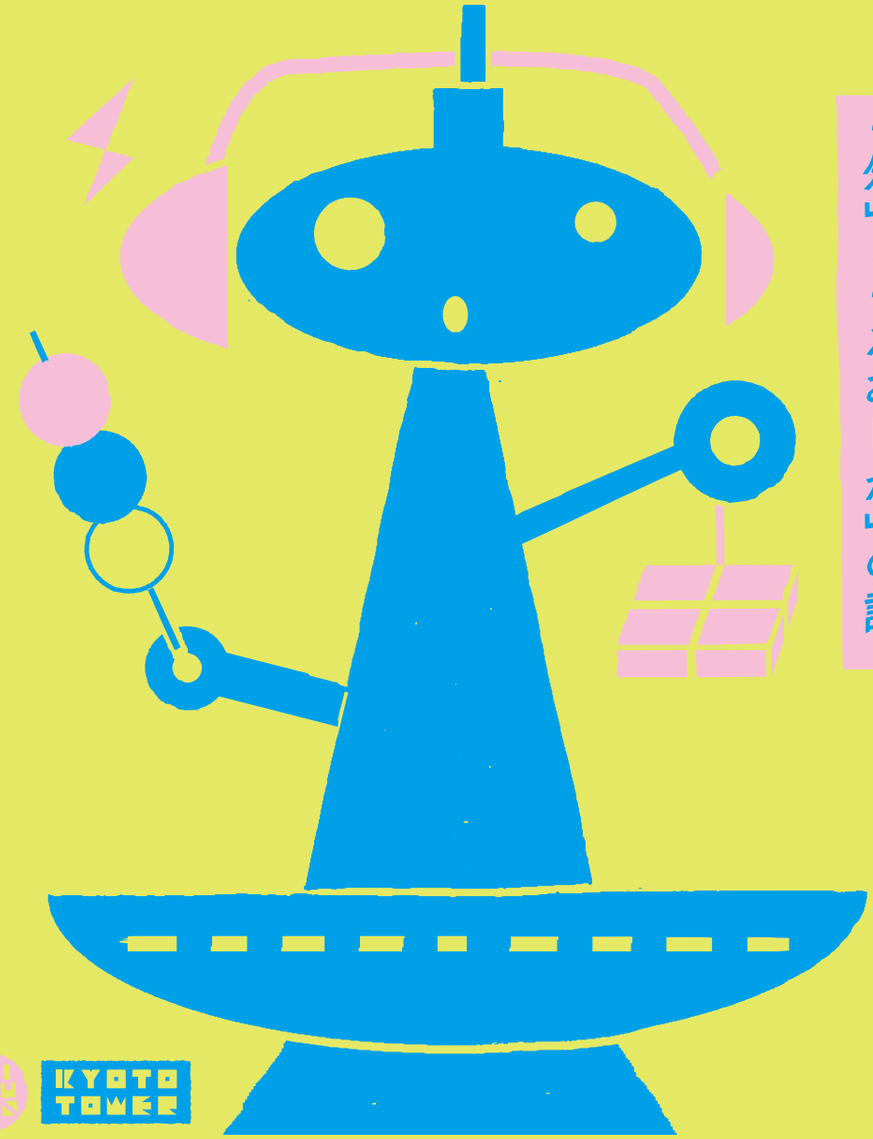
彼女は過去3度もやさしい魂胆で挑むも見事に玉砕。そこから50時間、約2日経ったころだろうか。場所は日本。88ヶ所巡礼――むろん4国のそれだ――を行う1人の女性がいた。「あーあ。971ヶ所巡礼くらいあっても全然いいのに」約69パーセントの参加者が

OMIYAGE MUSIC!! ①

京都の夏「外」と「えむじか」の話

飯塚大周

これは僕が旅行や街歩きをしていた時に出会った「音楽」にまつわるエッセイ・ルポ・評論をまぜまぜにして書き綴った文章です。



夏、お盆の季節になると僕は大抵京都に行く。みんなが大好きだった母方の祖父が天界から還ってくるので、お迎えするために。滅多に会えない親戚が集まることもあり、我々にとってお盆は貴重なセレモニーだ。それにそもそも従兄弟同士で集まるととても楽しい。祖父がそばにいてくれるからかもしれない。きっと霊魂もみんな、京都の夏を楽しみにしているのだ。

僕にとって京都という街は小さい頃からそういう存在だが、地元でも観光地でもないような微妙な距離感があった。血縁のないよそよそしい土地ではないものの、そこで生活している訳でもないから、土地勘（例えば場所の説明を聞く時に、通りの名前や「上がる・下がる」とか言われて「オッケー分かった」と頷くことができるような）と言えるものは僕にはほとんど備わっていない。昔はそれでちっとも構わなかったのだが、最近になってようやく僕は京都を「観光」してみたくなった。

特に深い理由はない。単純に知りたくなったのだ。古都と呼ばれ、祖父、母、従兄弟たちが過ごし、今も叔父さん夫婦と祖母が暮らす街について。

ここでは、その夏僕が京都で見てきたものを、主に「音楽」を切り口に（具体的にはライブハウスとレンタサイクル屋とそこで買ったCDについて）少々紙数をいただいて綴ろうと思う。

ライブハウス「外」

夜、四条河原町あたりのバス停からバスに乗り込んで僕は「錦林車庫前」に向かった。行先は「外」という名のライブハウス。車庫前に到着しバスを降りると、道路を挟んだ向かい側に「外」を見つけることができた。小さな雑居ビルに取り付けられた小さな看板。洒脱に「外」という字が光る。

受付を済ませ、そばにあったラックからライブや舞台公演のチラシを数枚頂戴した。チラシには東京では聞いたことのないような団体やイベントスペースなどがたくさん載ってあり、胸が高鳴る。あぁまだまだ自分は自分の知らないものに出会えるんだと。中でも特に「地点」という劇団の公演がとても気になったが、あいにく日程の都合が合わず、観に行くことは諦めた。

その夜の「外」のイベントは、デビッド・グラブスさんと宇波拓さんの音楽家二人によるコンサートだった。コンサートの内容をざっくりまとめると、グラブスさんが京都に短期滞在している間に宇波さんと共同制作した曲を演奏する、というものだ。

演奏はリバーブエフェクトを利かしたエレキギターによる大変美しいセッションで、揺らめくロウソクの灯りをじっと見つめるような優しさがあった。実を言うと僕の当初のお目当は空間現代というバンドの比較的激しいライブだったので、耳をシフトチェンジするのに時間がかかったものの、終盤は二人の演奏の虜にされたといっても過言ではない。

ここで少し「外」について説明しておこうと思う。「外」というのは空間現代というスリーピースバンドが運営しているライブハウスで、空間現代自身も活動拠点に据えている。この名前も空間現代の曲から取られたものだ。

僕はこのいささか奇妙な名前のライブハウスとバンドの存在を、京都のラジオ局・KBS京都の『大友良英のJAMJAMラジオ』という番組で知った。同番組に空間現代のギター・ボーカル担当の野口順哉さんが出演した時「外」の話題になったのだが、そこで語られたバンドが自らの場所を持つ意味をとても興味深く拝聴したのを覚えている。僕なりにその話を要約させてもらうと「創作時における実験と公演時の技術的課題を効率的かつダイレクトに解決できる」ということだ、と思う。

大抵の場合はリハーサルや創作の場とコンサートを行う場所が異なるため、当日を迎えるまでは本番の環境を仮想して作業しなくてはならないのだが、自らが場所を持てば、観客がいるかいないかという点以外、本番と創作の環境は同一にできるという訳だ。

グラブスさんと宇波さんの共同制作と演奏がシームレスに行えるのも「外」のような場所ならではといえる。おそらく技術的、事務的なストレスはほとんどかかることなく、創作とリハーサルに集中できたことだろう。また先述した劇団「地点」も団体自身が場所を持っており、稽古や実験、公演を同じ場所で行うらしい。このように地方都市で行われるクリエイションには興味深いもの

ライブハウス「外」 京都府京都市鹿ケ谷法然院西町18 soto-kyoto.jp

○注意　ここに書いてある店舗等の情報はすでに古い恐れがございます。最新の情報はご自身でご確認なさいますようお願いいたします。

「RAP PHENOMENON」（空間現代 × Moe & Ghosts）

さて、そういえば空間現代の話をしておきながら、彼らの音楽について全然触れていなかった。ならば是非とも僕が「外」で購入した空間現代のCDについて書かせていただきたい。アルバムの名前は『RAP PHENOMENON』。Moe and Ghosts というヒップホップユニットとコラボレーションした作品だ。

バンド全体のリズム感は抜群で、それでいて所々意図的に演奏をズラすことにより、楽曲に絶妙な緊張感をもたらすことに成功している。大抵ラップで使用されるトラック（音源）は身体的に理解しやすいフレーズを作って、それをDJのアドリブなどを織り交ぜつつ延々とループさせるのが一般的だが、このアルバムでは空間現代が複雑なリズムと積極的な変化を好んで取り入れており、相当リズム感を鍛え上げた者でなければ到底ついていくことは難しいだろう。それにばっちり呼応するラッパーのMoeさんには甚だ脱帽である。

リリックの方は一見ナンセンスな言葉遊びのようにも聞こえるが、そこからは生活の気だるさや諦観が垣間見える。だが虚脱感に苛まれて俯くのではなく、静かに怒りや苛立ちを言葉の中に潜ませており、その点が非常にクールだ。Moeさんのソリッドなラップと、野口さんの高速道路に吐き捨てるように叫ぶボーカルにより、それらの言葉が耳から心臓を突き刺すように放たれてゆく。

収録された全曲を推したいが、僕としては特に一聴の価値ありと思うのが6曲目の『可笑しい』だ。ここには小説家の山内マリコさんの作品集『ここは退屈迎えに来て』にある『私たちがすごかった栄光の話』という短編のワンシーンを引用し、金太郎飴を切ったように日本中に存在している国道沿いの郊外の風景が聴く者の不安な感情を煽りながら描かれている。地方と東京の差異と関係性について考えさせる意欲的な実験作だ。引用された小説とあわせて、是非とも聴いて欲しいと思う。

レンタサイクル「えむじか」

京都で出会った思い出をもう一つ。京都市内を観光する際、自転車を借りて各地を巡る観光客は多いらしい。実際、寺院などの観光スポットが近くに固まっているため、行きたいと思いついたらすぐに向かえて大変便利なのだ。市内にはいくつかレンタサイクル屋があるが、中でも「えむじか」という店は比較的廉価で利用しやすいと思う。僕も「えむじか」にお世話になったクチだ（ちなみに僕は祇園店に行った）。是非ともオススメしたい。だが、自転車以外にも勧めるべき理由が「えむじか」にはある。店長やスタッフが持つ、熱い音楽への愛だ。

彼等の音楽愛。それは単に古いLP盤を沢山持っているとか趣味で日曜日にギターを爪弾いているくらいのことではない。現在進行形で活動している関西のバンドやシンガー、自分達が作った音楽を紹介したり売り出したりしているのである。僕も店に入ってみた時に目を丸くしたが、壁に備え付けられた棚にインディーズやアマチュアで活動しているミュージシャン達のCDと、彼等のライブの告知などがズラッと誇らしげに並んでいるのだ。もちろん装飾などではなく、全て販売されている。他にも音楽イベントの開催やグッズ制作など、活動は精力的だ。

「CYCLE AND MUSIC 3」（V.A）

僕はそこで『CYCLE AND MUSIC 3』という自主制作コンピレーションアルバムを購入した。これは自転車をテーマにした音楽を詰め込むシリーズの第三弾であり、「えむじか」開店10周年記念でもあるそうだ。

アルバムはロック、ポップス、フォーク、ファンク、アイドル、民族音楽風や民謡…と音楽のジャンルを縦横無尽に飛び回り、聴く者を飽きさせない。それにこのヴァリエーションの豊かさ、単に音楽が趣味という人が集まっただけではこうはならない。それぞれが持ち味は何かを理解し、ディレクションされている。完成度と自由度ともに高く、そしてお祭りみたいに楽しい作品だ。

京都にちなんだ歌もある。だが、演歌や歌謡曲の歌詞にあるような悲劇的な地名として使われているのではない。自転車と生活の風景として比較的あっさり描かれているのだ。これは他で真似し難いこのアルバムの魅力である。鴨川とかを見て「これがあの鴨川かぁ〜」などと思ってしまう旅行客には、当然ながらこういうことは決して表現できない。その土地に住んでいるからこそ歌える言葉があるのだ。録音と配布の技術とスピードがますます勢いを増す昨今において、歌が持つ場所性とローカリティの面白さに僕は少し感動した。日本にはマイナーでローカルな音楽がまだ沢山ある。もっともっと探してみたい。

「ミスターヤングメン」

最後に、叔父さん夫婦が経営している店「ミスターヤングメン」を皆様にご紹介したい。「カジュアルお好み焼き」をキャッチコピーにしている飲食店だが、お好み焼き以外にも色々なメニューがあり、夜は仲間と軽くお酒を酌み交わすこともできる。中でも焼きそばとお好み焼きとおにぎりを同時に食べられるボリューム満点の「ヤングメンランチ」は絶品だ。四条河原町付近を立ち寄った際は是非ともどうぞご贔屓に。

ここでは特にCDの販売もコンサートもない。が、鉄板から聞こえてくる、ジュウジュウと焼ける音や、ヘラがぶつかる音がきっとあなたの耳を楽しませてくれるだろう。やがて口の中につばきが溢れてくること間違い無しだ。

☒を失くして。

大竹竜平

最初に異変に気がついたのは都内の公立中学校に通う男子生徒***A***だった。

数学教師が***A***に小テストの答えを板書するよう命じたところ、彼は黒板の前で身動きが取れなくなってしまった。***A***は教師の書いた任意の点を見失ったのだ。数学の成績は悪くない。将来は理系が強い高校へ進学し、ロボット工学を学ぼうと密かに情熱をたぎらせ、塾の特進コースに変更したばかりの彼に突然襲いかかったその症状にまだ名前はなかった。

男子生徒が教師に小言を言われながら憮然とした態度で着席したほぼ同時刻、都内の業務スーパーで時給９７０円で働く主婦***B***のキーボードを叩く指が止まった。彼女は先月からアルバイトの出勤表の作成を任され、事務所のエクセルで作業中であった。16人目のバイトのシフトを記入しようとした瞬間、彼女も突然それを見失った。息子の大学受験はうまくいき、働き盛りの夫の帰りは遅い。店長との情事は誰にもばれる気配がなく、最近始めたヨガのおかげで悩まされ続けた肩の痛みもやわらぎ始めた最中、全てが順調に進んで見えた彼女の目の前で突然、画面に表示されていたはずの「☒」の文字が消えたのだ。

その日から日本全国で同じような症例が報告され、著名な大学教授***C***氏はその病気を「集団☒失読症（☒☒Ｄ）」と名付けた。命名から２ヶ月後、日本国民の５割以上の発症が認められたため、彼らが病名を認識できるよう考慮し名前から☒の文字を取り「特定文字集団失読症（ＳＣＧＤ）」と改名された。

やがて少年***A***の発症から半年経って日本に居住するほとんどの国民が☒を見失ったタイミングで、国は指定難病リストからＳＣＧＤを消去した。現代では尻尾の生えていない人間が正常なのと同様に、この国で☒を認識できる人間がいないのが正常だと認められたためである。

日本国民がすっかりこの奇病に慣れきってしまった頃、ようやく世界中のメディアがＳＣＧＤを取材しに来日を始めた。半年もの間メディアが静観していたのは、この症状が日本で生活する者にのみ発症すると判明し、安全性が立証されたためである。

イギリスのとあるＴＶレポーター***D***は来日するとさっそく渋谷で「☒」の文字を印刷したフリップを掲げ通勤中の人々に見せて回った。

「スミマセンこんにちわ。あなたはこれがナニに見えますか？」

Dがたどたどしい日本語を交えて質問すると、多くの日本人は眉をひそめて無視を決め込むか、不機嫌そうに何も書かれちゃいないと答えて足早に去って行った。しかし、数人の日本人が☒だと認識はできないが、そこに描かれた形について答えてくれることもあった。例えば通学中の男子小学生はそれがゲームに出てくる伝説の戦斧に見えると答え、駅前で試供品のガムを配っていた若い女はそれをひっくり返った小文字のｄだと答えてみせた。その他にも形自体は指でなぞってみることはできるが、うまく言葉に表現できないといった人間が少数ながらいることが確認された。

レポーター***D***は帰国すると、早速このインタビューを文字の読めない特殊な島国のモンキーとして面白おかしく編集して紹介した。放送後、ＴＶ局とレポーターの元に抗議の電話が猛烈に鳴り響き、その対応に追われていたのが新米スタッフ***E***である。一日中クレームの対応に追われてうんざりしていた***E***が最後に取った電話が、スコットランドの言語学者***F***氏からのものであった。放送を見て興味を抱いた***F***はレポーターに詳しくその症状を聞きたがっていたようだが、混乱した状況でスタッフ***E***はレポーターに取り継ぐのが面倒になり、「***D***は早速クビになり連絡先は誰にもわからない。もしかしたら今ごろ森で首を吊ってるかもしれないから、話を聞きたければ近くの森を探せ」とでまかせに電話を切った。

受話器を置いた***F***氏は小さなため息をつくと、冷めた紅茶をレンジで温め直しながら素朴な疑問を反芻していた。日本人が突然☒の文字を認識できなくなったという事実はなんとか飲み込んだ。いや、飲み込むしかなかった。しかし何事もなかったように日本の経済が回って、パニックもなく生活できていることが不思議で堪らなかった。日本人は漢字を使う民族のようだが、アルファベットを使う頻度が高いことも知られている。当然、数学や化学式、プログラミングなどにもこの文字は無数に存在しており、☒が使われる単語だけでも相当な数になる。☒が使えなくなることで想定される不自由が無限に想像され☒を悶えさせた。テレビに映るいつものクールな日本人の様子が信じられず、つい野次馬のように電話してしまったことを少々恥ながら温めすぎたマグカップが冷めるのを待っていると、***F***氏の指は自然と、数年前に学会で知り合った日本に住むアメリカ人研究者***G***の電話番号を探していた。やはり研究調査は実地に限る。

日本のつくば市に住む***G***の携帯が着信音を鳴らし、隣で寝ていた妻***H***は目が覚めた。妻は半裸で眠る***G***の毛深く厚い胸を叩いてみたが、目を覚ます気配は微塵もない。起きない夫にも深夜に目が冴えてしまった自分にも腹が立ち、***G***の胸を赤い手の跡が浮かぶまで叩き続けた。穏やかに眠る夫の顔を見ていると一心不乱に大学の講堂でジャンベを叩いていた頃を思い出す。初めて彼に出会った日、***H***は手の皮が剥けるまで熱心にジャンベを叩いていたのだ。なつかしい乾いたリズムを思い出しながら、再び眠ってしまった***H***が目覚めた時にはもう朝だった。既に目を覚まし二人には窮屈なベッドで新聞を読んでいた夫が朝の挨拶も言わずに一面を指差し言った。

「***I***が捕まった」

Iは***G***と***H***の大学時代の旧友で、現在はスパコンの研究者であり研究企業の代表として名前が良く知られている日本人だ。同期の中でも出世頭で、人の注意を引く才能のある人物だった。新聞によると半年以上前に世間を騒がせた特定文字集団失読症に関与するなんらか容疑で任意同行を求められたとのことである。

「あれは病気でしょう？　***I***が何をしたの！」***H***はまだ寝ぼけた頭で夫を責めるような声を上げた。***G***は宥めるように妻の背中を撫でながら***J***のことを懐かしく思い出していた。

Jと***I***は学生時代から交際していた。この学部には珍しく派手で華のある***I***が、目立たず、お世辞にも美しいとは言えない***J***を選んだ事は学校の小さな事件だった。***J***は優等生にはよくいるタイプで、おとなしくて愛嬌がなく、友人を作るのがヘタで、学食ではうどんしか食べない偏食家だった。そんな彼女を***I***が選んだのは彼女の脳みその皺に惚れたのだろうと揶揄する声もあった。***J***は人工知能を学び教授の元でその才能を存分に咲かせていた。学生でありながらその独特な感性と閃きを教授の***K***は高く評価しており、***J***もまた自分の研究が***K***の力になれる事を喜んでいた。そんな***J***の活躍を良く思わない人間もいた。***K***の助手を務める***L***と***M***である。事の発端は***K***が海外での研究発表に学生である***J***を連れゆくと言い出したことである。長年***K***の助手を務め、一緒にプロジェクトを進めてきた***L***と***M***は徹底的に陰湿な方法で***J***をいじめ始めた。男の嫉妬は過激であった。やがて***J***は大学に来なくなり、その理由を***I***に打ち明けた夜に研究室で手首を切って死んだ。検死の結果、彼女が最後に取った食事はうどんであった。

その日から*I*はおかしくなった。いや、傍目には優秀で勤勉な学生に見えた。*I*は*J*の亡き後、自ら*K*の研究室に入り*L*と*M*に悟られないように復讐の機会を待っていた。*L*と*M*は供に独身で、同じ人間に好意を持っている事を*I*は知った。その女の名前はパッツィーというアメリカの研究員で*K*の研究室でともに働くテクニカルスタッフだった。*L*と*M*の恋心は苛烈に燃えていた。*I*は*J*が生前開発していた人工知能「Arty」とパッツィーの名前が一字違いであることに眼を付けた。

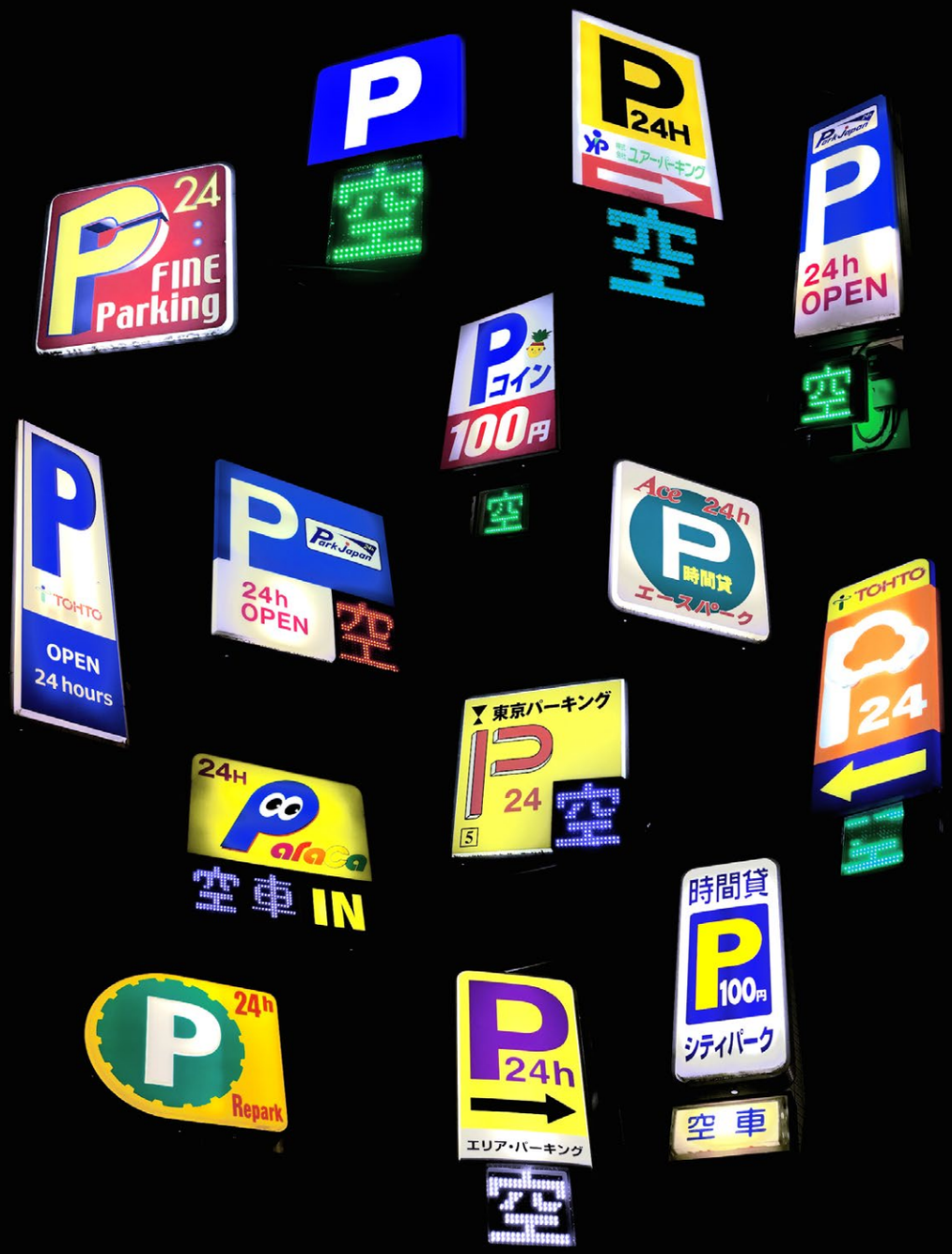
「Arty」は日常的に普及したデバイス機器のビックデータを利用し、独自の情報処理能力で高度な知性を備えた人工知能だ。芸術家気取り。という名前も謙遜ではない。その知性は人間とは違った独特な計算モデルで人間の未熟な意思決定の支援や効果的な治療法の確立などに貢献している。ビッグデータの多くは近年全国民に普及した健康アプリの統計を利用していた。このアプリが爆発的に普及したのはその手軽さにある。スマホのロック解除の際に自動的にアプリが起動し、ユーザーの指先と光彩をスキャンし健康を確認することができたからだ。開発者の*N*は中小企業のしがないエンジニアであったが、心機一転、青年海外協力隊に従事し、貧しい国でも人々がスマホに依存し、健康にかけるお金を通信料に注ぎこむのを見てこのアプリを考えついた。日本で開発されたアプリのビッグデータを医療に貢献する研究機関に提供するのは*N*にとって自然なことであった。

*I*は*K*の研究室からArtyの技術を複製し、友人と供にスパコン研究企業を立ち上げ、その特異な人格で衆望を集め莫大な助成金を元に、より強いArty Jr.を作り出した。彼にとっては*I*との間に出来た子供であった。Arty Jr.は*N*のアプリのビックデータを利用し、これによってアプリを通して特殊な情報をユーザーに逆流することに成功した。アプリの利用者は気が付かない内に特定の文字が認識できなくなったのだ。これは一種の集団催眠に違いなく、あまりにも非科学的だった。そして、その文字を名前に持つ人間の認識も形を変えた。*L*と*M*の恋情は自然と*J*の開発したArtyに向けられることになり、彼らはその一生を一字違いの無機物に献身することになった。

取調室で*I*の告白を全て聞いた*O*は、すぐに*K*の研究室に走った。亡くなった*I*のことを調べ、この事件の発端となった*L*と*M*に面会した。ここで働く全ての研究者から話を聞いたが、例のアメリカ人研究員だけが不在であった。半年前、突然姿を消していたようだが誰も気付いてはなかった。*K*教授から連絡先を聞き出し、短いメールを彼女に送って*O*は指定した待ち合わせ場所へと向かった。

*O*は入り組んだ住宅地の隙間にポツと現れた駐車場で彼女を待っていた。名前を一字失った彼女と無事に面会できるものかと不安はあった。小雨の降りしきる夜空を眺めると黄色く輝く駐車場の看板が目に飛び込み、*O*は看板に大きく描かれた奇妙な記号をしばらく凝視していた。

〈続かない〉



指先4章

今田健太郎

0

目が覚めてもスーツは見当たらなかった。

その日は大学時代の友人の結婚式当日だった。自分が呼ばれたのは披露宴というやつかもしれない。ともかく招待状は手元にあるのに、着ていかねばならないスーツが部屋のどこにも見つからなかった。探せばあるはず。どうしてそう思うんだ。捨てた記憶がないから。なるほど。そんな調子で自分と喋っていたのが昨日。寝れば見つかるはずだ。ふと芽生えた根拠のない自信は、酒を飲むだけで確信に変わった。足元を見る。散乱する空き缶の口から煙草の吸い殻がこぼれている。あれは本当に昨日のことだったのだろうか。足元を見る。散乱する空き缶の口から煙草の吸殻がこぼれている。

なにもかも嫌になり、電子ピアノの前に座り、弾いた。

それは高校時代にバンドで作った曲のようだった。しばらく弾いたのち、気が済んだのか、深い溜息をつくと、彼はピアノの録音ボタンを押して、また同じメロディーを弾きはじめた。

彼？　自分の話だ。

なにもかも嫌になり、と言ったが、自分が自分であることが嫌だった。探しているスーツは大学時代に買ったもので、もし見つかっても入らないかもしれない。

ヘッドホンを抜き、そのメロディーを爆音で流し、缶ビールを開けた。

1

アパート裏を走る電車の轟音のせいで気づくのが遅れたが、どうやらその歌声は、左隣の３０６号室から聞こえてくるようだった。

「その指先に　光が差して　あの帰り道　また戻りたい」

自分のメロディーに勝手に歌詞をつけて歌っていた。勝手だ。本当に勝手だ。だからこっちも勝手に少しだけ泣いた。隣との壁が薄いので、嗚咽を気取られぬように本当に少しだけ。

バイトの面接日だったが、約束の時間から4時間経っていた。

2

右隣の３０３号室の住人は、無精ひげをぼさぼさと生やし、くしゃみの音が大きく、いかにもがさつで不潔な中年男性だった。

だからこそ、壁越しに聞こえてきた彼の美しい歌声と繊細な歌詞に驚いた。

「きょう見る夢を　明日も見よう　そっと掴んだ　震える指先」

中年男性の部屋には、自分と同じく来客はひとりも来ないようだった。

3

すぐ真下の部屋である２０４号室に住む子供（4歳くらいだろうか？）が自分のメロディーにこんな歌詞をつけて歌うのを聴いた際の感想は、以下の三点にまとめることができる。

「ペンを握った　あなたの指先　まつげの長い　あなたの横顔」

第一に、子供の語彙ではない点。おそらくは母親（生活音から判断する限り、彼らは母子家庭のようだった）が先に歌詞をつけて歌ったのを真似しているのだろう。

第二に、モチーフとして「ペン」を持ってきた点。文筆業に漫画家、ペンをメインの仕事道具にしている職種は多々ある。しかも、そうでなくても書類を書くとき人はペンを使う。さらに言えば、もはやペンなんて誰でもふつうに使う。つまりペンは、どんな人が聴いてもその人なりのイメージを膨らませやすい言葉なのだ。むろんペンという語感がメロディーに乗ったときのおもしろさもいい。やや技術論に過ぎたが、非常にいい着眼点をしていると言える。母親は。

第三に、自分のメロディーはかなり「指先」を連想させるのだと気づいた点。

4

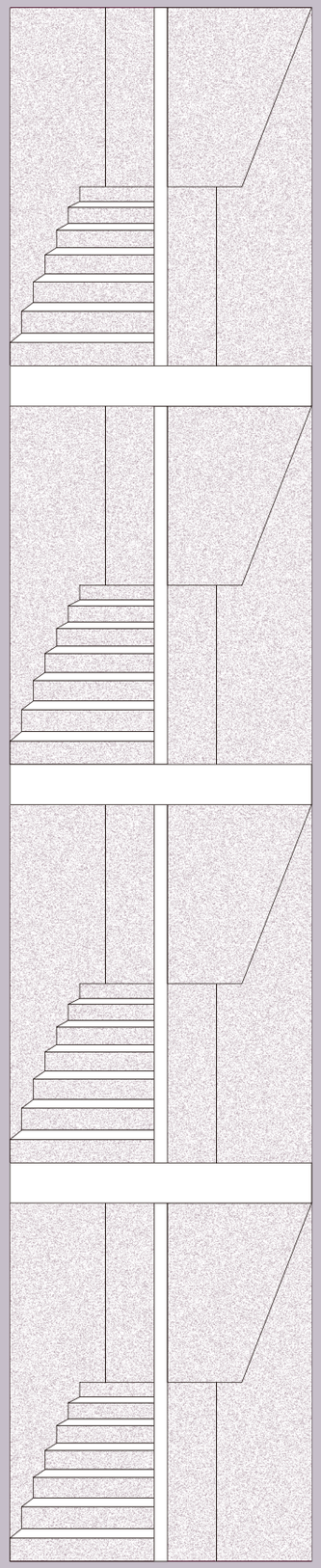
朝9時。眠る前。

煙草の吸い殻を空き缶に押しつぶしていると、引越しの音。長らく空き部屋だった真上の４０４号室に新しい住人がやってきたようなので、わたしはピアノのボリュームを上げた。

おまけ

４０４号室の住人はどんな「指先」の歌詞をつけるのでしょう。

あなたも４０４号室に引越してきた気分で考えてみては？



イタコごめん

鶴田 理紗

幽

霊や死後の世界というのを信じなくなったのは、いつからなんだろう。信じなくなるきっかけがあったという訳ではなく、最近ふと、もう全然信じてないなぁ、ということに気づいたのだ。今もビビりな性格なんだけど、小学生の頃は特にこわがりで、「ほん怖」をうっかり見てしまった夜は一人でトイレにも行けず、夢には必ず「ほん怖」の幽霊が出てきて怯えた。多分その頃はもう、漠然と「いつか死ぬ」ことは分かっていたと思う。けど、死んだとしても、私もきっとあの怖い幽霊やお化けになって、みんなの前に現れられて、また会えるんだと思っていた。と思う。当時「地獄先生ぬ〜べ〜」をよく読んでいたから、その影響で信じていたんだと思う。

初めて「死ぬのが怖い」と思った時のことは今でもはっきり覚えていて、あれは高校1年生の時だった。地学の授業で、先生が太陽について話していた。太陽には寿命があり、うん十億年後には滅びるということ。太陽が滅びたら地球も一緒に滅んでしまうということ、を話していた。私はその事実にとてもショックを受けた。地球がなくなるなんて、この世界が永遠じゃないなんて考えたこともなかったから。私が死んだ後も世界は続くと信じていたし。死んで生まれ変わってを何度も繰り返し、ちょうど太陽が滅ぶ直前の世界に生まれたとしたら、私はこの世の終わりを目撃してしまうのだろうか…。穏やかな午後の教室の中で、私は人知れず衝撃を受けていた。

そのショックは家に帰ってからも引きずり、夜寝ようと思っても、地球が粉々になるイメージ映像が頭から離れず、一睡もできなかった。二段ベッドの下段では妹がスヤスヤ眠っている。妹と奪い合って得たベッドの上段。今は天井や照明が近くて怖い。死ぬのが怖い。すごく怖い。幽霊になっても、生まれ変わっても、最後はカンペキに、星ごと死ぬんだ。絶対に逃げられないんだ。揺るがないこの事実に、私は絶望した。

ちょうどその時期、私は叔母から「生きがいの創造」という本を借りた。

母の双子の姉、通称〝マキちゃん〟は、フリーでイラストレーターをしている、私の10倍明るく20倍パワフルな人だ。私が高校1年生の時に、ずっと住んでいたサギヌマを離れて実家に戻り、祖父・祖母と3人で暮らし始めた。祖父の家と私たちの家は近所なので、マキちゃんに会いやすくなって私はとても嬉しかった。学校帰り、しょっちゅうマキちゃんの部屋に遊びに行っては、延々とおしゃべりしたり、仕事をする彼女の隣りで本やマンガを読んで過ごした。

当時、マキちゃんは友人から「退行催眠」という、催眠状態で前世に戻り、自分の前世を知れるというセラピーを受けていたので、私はその体験談をよく聞いていた。「前世は男だったんだ」「理紗と私は、前世は親友同士だったんだよ」など楽しそうに話すので、とても羨ましかった。だからマキちゃんの部屋にはそれ関連の本がいくつもあり、その内の1冊、「生きがいの創造」を勧められて借りたのだった。

その本は、私を絶望の底から救ってくれた。内容は記憶の限り概ねこうである。「死んだらどうなるか？生まれ変わり、前世や来世なんてある訳がない、死んだら無でしかない、という意見もある。でも、私たちは死んでみないと答えは分からない。死んでしまったら、答えを誰かに教えてあげることもできない。生きているうちは答えなんて絶対分からないんだから、だったらポジティブな方を信じた方が人生気が楽じゃない？」





たしかに！例え信じられなくても「信じたいなぁ」という気持ちでいるだけで、幾らか心が楽になった。あの授業以来、壮大な宇宙の前では生き物なんて無力で、もう前世や来世なんて信じられないでいた私を、この本は、救ってくれたのだった。

そんな高校時代を経て、２０１１年に私は大学生になった。家から大学が遠かったこともあり、授業にバイトに演劇に、あっちに行ったりこっちに行ったり、とにかく忙しくしていた。マキちゃんにも、近所なのに全然会わなくなっていた。そして２０１３年の秋、私が３年生の時、父方の祖父が亡くなった。深夜、病院で祖父を看取った。近しい人の死を目の当たりにするのは初めてだったので、薄暗い病室で点滅し続ける心電図の赤い光、鳴り続ける「ピー」という音が未だに忘れられない。翌々年の夏、母方の祖父も後を追うようにして亡くなった。

「イタコに会いに行こう」

最初に言い出したのは、やっぱりマキちゃんだった。２０１７年、正月。母方の祖父の家に集まり、私たちは、祖父のいない２度目の正月を過ごしていた。

「イタコに口寄せしてもらって、おじいちゃんと話をしよう」

青森県、下北半島。日本３大霊山の１つである恐山に、イタコはいるという。死者の霊を呼び寄せ、自分の身体に魂を憑依させて、その言葉を代わりに伝える「口寄せ」を行う。普段は青森市内に住んでいて、恐山大祭（７／20～24）と秋詣り（10月上旬の３連休）の期間だけ恐山菩提寺で口寄せしているそうだ。だからその期間中は沢山の人が押し寄せて大行列になるらしい。しかし近年は高齢化が進み、イタコの人口がどんどん減っているという。料金は１人降ろす毎に４０００円。

マキちゃんの提案に母はすぐ賛同した。「せっかくなら、おじいちゃん２人とも呼んでもらおう」と母。父もその場ですぐ調べ始め、日取りや交通ルート、宿の候補までも出してしまっていた。祖母はやれやれといったような呆れた顔で笑っていた。そして私も、その場で賛同した。「なんだか面白そう」というのと、寺山修司の映画『田園に死す』のロケ地巡りができるからだった。

私はもう、そういう霊的なものを全く信じなくなっていた。信じたいけどどうせあり得ないと思っていたし、高校時代にあれこれ思いを巡らせていたこともすっかり忘れていた。年齢を重ねるとそういうセンサーも衰えていってしまうのかしら。私は、イタコにどんな質問をしてやろうかと楽しみにしていた。答えられない質

問をしても、イタコは祖父になりきって答えてくれるのだろうか。それとも本当に、祖父はイタコに口寄せされてしまうのだろうか。

父の実家は東京に、母の実家は神奈川にある。だからお墓も、それぞれ東京と神奈川にある。なのに青森まで行かないと話せないなんて、ヘンな話だ。「こんな狭いとこに入っちゃってねぇ」祖母がお墓や仏壇に向かっていくら話しかけても、祖父は返してくれない。祖父は今どこにいるのだろう。ひょっとして青森？ちがうよね。あ、イタコがこっちにいる祖父をわざわざ青森まで呼び寄せるのか…？うーん、よく分からない。

２０１７年７月。恐山大祭の時期を狙って、父、母、叔母（マキちゃん）、私の４人で青森へ向かった。祖父と話をするために。青森まで飛行機で行き、空港でレンタカーを借りた。１日目は、三内丸山遺跡や県立美術館を観光して、青森市内のホテルに泊まった。次の日は午前３時にホテルを出て、夜もまだ深い暗闇の中、私たちは車を走らせた。下北半島に近づくにつれどんどん雲が厚く濃くなり、ポツリポツリと雨が降りだした。不穏な天気、睡眠不足、未知の場所への期待がまぜこぜになり、私は不思議な高揚感に包まれていた。

午前６時、無事に恐山菩提寺に到着した。前日のカラッとした晴れ模様とは打って変わり、この日の空はどんよりと暗く、気温も低く寒かった。雨はいよいよ本降りになり、地面はところどころ大きくぬかるんでいた。そして辺り一面、硫黄の匂いが漂っていて臭かった。私は箱根の大涌谷を思い出した。

「雨のおかげで雰囲気出ていいね～」マキちゃんはウキウキしながら車を降りた。門をくぐると、『田園に死す』のオープニングにも登場するあのお寺が目の



前に現れた。私は感激して何枚も写真を撮った。左手には、江戸風のフォントでデカデカ書かれた「イタコの口寄せ」の文字と、雲や修行僧のイラストがあしらわれた、なんとも拍子抜けするような看板が立っていた。そして奥では、今まさに、イタコによる口寄せが行われていた。ビニールシートで覆われた小汚い小屋が等間隔で並び、その前にはすでに行列ができていた。

どうやらイタコは３人いるようで、私たちはどのイタコにするか悩んだ。手前・真ん中・奥の小屋。行列の人数は奥のイタコが１番多かったが、それ以外の違いはなかった。チラと中の様子を覗いたら、手前の小屋には眼鏡をかけたパンチパーマのお婆ちゃんがいた。ザ・イタコって感じでテンション上がった。他は人も多く暗くてよく見えなかったので、「並んでる人が多いイタコが、人気のイタコ

なんじゃないか」と言う父の提案で、1番行列が長い奥のイタコに並ぶことにした。すでに15人ほど並んでいるし、1人降ろすのに20〜30分かかるらしい。雨は小降りになってきたが、気温はかなり低く、立ちっぱなしだと凍えそうなので交代で並ぶことにした。まず母とマキちゃんに並んでもらって、父と私は境内を散策することにした。

菩提寺でお参りした後、岩肌が剥き出しのゴツゴツした道を歩き、賽の河原、無間地獄、重罪地獄（と看板が建っていた）を越え「極楽浜」に辿り着いた。正式には「宇曽利湖（うそりこ）」という。重たい雨雲が湖にのしかかり、その境目を曖昧にさせていた。湖がどこまでも続いているように感じて、私はゾッとした。ここは水子供養の地でもあり、浜辺には風車や積み石、飴や煎餅などのお菓子があちこちに供えられていた。まるで時が止まっているかのような光景だった。ここに来ている人たち、みんな石像なんじゃないかって思った。忘れられない、忘れたくない人たちが集まる浜辺。イタコに会う行為って、現実の時を止めるための行為なんじゃないか。そんなことを考えながら湖を眺めていた。水はすごいよなあー。ずっと動き続けてるもんなー。私は、遠くの方で黄色い傘がぷかぷか浮いているのを見つけ、それがどこへ行くのかじっと見ていた。けど、同じようなところを行ったり来たりしているだけだったので、諦めて戻ることにした。

極楽浜から戻ると、パンチパーマイタコが小屋の前で暇そうにタバコを吸っていた。マキちゃんと母は、前に並ぶ女の人と何か話していた。母たちと同い年位で、彼女も父を降ろしてもらうのだそう。「毎年来てるんだけどね。あのお婆ちゃん（パンチパーマ）は津軽弁がキツくて何言ってるか分からないのよ。だから若いイタコさんの方がいいの」と話す彼女も津軽弁なのでところどころうまく聞き取れず、私は曖昧に返事をした。マキちゃんたちはその後もしばらく喋っていた。マキちゃんと母のすごいところは、初対面の人ともすぐ仲良くなって友達みたいに話せちゃうこと。おまけに声のトーンもソックリなので、さすが双子だなといつも感心する。

私たちが並んでいるイタコ、先週テレビに出たらしいよ、とこれも前の女の人が教えてくれた。早速ネットで検索してみると「恐山が認めた伝説のイタコ！最後のイタコ！」「大女優〇〇も大号泣の霊視体験！」「最後のイタコはヤラセや嘘ばかり？」と胡散臭い見出しばかりが目に入ったので咄嗟にケータイを閉じた。でも、という私もイタコに「おじいちゃん、そっちはどんな所ですか？」て聞こうとしてる。で、どんな答えが返ってくるのかワクワクしている。こっちは極楽だよ〜とか、先祖のじいさんと毎日酒飲んでて楽しいよ〜とか言ってくるのかな。いや、もっと答えられなさそうな質問をしてみようかな。あー、ごめんねイタコ。

そうこうしている内に前の人の順番が来て、いよいよ次に迫ってきた。急に緊張してきた。私たちは半分小屋の中に入り、横の長椅子に腰を下ろして待った。ここからは中の様子が丸見えだった。「最後のイタコ」と呼ばれる彼女は、パンチパーマイタコよりも確かに若く、白髪混じりの黒い髪をひとつに縛っていた。そして目を瞑ると、もの凄く長い数珠をジャラジャラ鳴らしながらお経を唱え始めた。唄っている、と表現した方が良いかも知れない。民謡を唄っているかのようなリズミカルなお経を、イタコは途切れることなくひたすら唱えていた。それがしばらく続くと、急に口ぶりが変わり何かを話し始めた。降りてきた！

「いやーこんな遠いところまで来てくれて本当にありがとうその気持ちが嬉しくて・・・」

お経の延長かのようにリズミカルに言葉を繰り出すイタコ。津軽弁はキツくなかったが、話すスピードがかなり速くて聞き取るのに精一杯だった。と、女の人が小さく泣いているのに気づき、私は思わずうつむいた。小屋の中はイタコと女の人の声だけが響いていた。だんだん怖くなってきた私は、一応と思って持ってきた祖父の形見の腕時計をつけた。もう少しで祖父に会える。あ、…録音しよう、とこのタイミングで思いつく。なんでもっと早く思いつかなかったんだ。でも…バチとか、当たったりしないかな。一瞬日和る。イタコに「録音してもいいですか？」て聞いてみようか。や、「いいですよ」なんて言ってくれる訳がない。どうする？録音する？しない？いやコッソリすればいいんじゃない？しない後悔よりする後悔！でももしイタコにバレたら…というところで順番がきてしまったので、録音することはできなかった。



約3時間待ち、私たちはやっとイタコに会うことができた。靴を脱ぎ屈んで中に入ると、すぐ目の前にイタコがいた。生イタコ…！ゴザの上に敷かれた薄っぺらい座布団に、私たちは正座して座った。4人で並ぶのが限界の狭さだった。「父を降ろしてください」と父が言うと、イタコは、名前・命日・死んだ場所が家か病院かを聞いてきた。それに答えると、彼女は鉛筆でノートに書き留め、そしてさっきと同じように数珠をジャラジャラ鳴らしながらお経を唱え始めた。ようやく待ちに待ったイタコが目の前でお経を唱えている…。感動と恐怖と興奮で笑いそうになるのを必死に堪え、祖父が降りてくるのをじっと待った。なんでも数珠の音は、降りてくる場所を死者に知らせるためのものだとかなんとか…。

「いやーこんな遠いところまで来てくれて本当にありがとうその気持ちが嬉しくて・・・」

うおあ、降りてきた！……あれ、でもこれさっきも言ってたような気がするな。気のせいかな。「もっとずっと生きていたかった90、100までも生きられると思っていた本当に残念で悔しい・・・」これも似たようなこと言ってた！……はは〜ん、「死者が言いそうなこと定型文」を何パターンか用意してるんだな。でもそれにしても、前の人とあまりにも同じセリフが繰り出されるので、また笑いそうになってしまった。

「この病院で良かったのかなと不安になった恐かったしすごく痛かった」

あれ、これはさっきは言ってなかった。これも定型文の1つ？

「ばあさんが風邪ひいてるんじゃないかと心配だ」



これは誰の言葉？

「孫がみんなそれぞれ活躍しているのが本当にうれしい」

もしかして、本当におじいちゃんなの…？

母が、隣りで泣いていた。マキちゃんも、めっちゃメモとりながら泣いていた。あ。その瞬間、私は自分だけが何かから取り残されていることに気づいた。父は…父がどんな様子で聞いているのか急に気になり、横目で見ようとした。でも、なんとなく見てはいけない気がしてやめた。

「何か聞きたいことはあるかな」

ほぼノンストップでしゃべり続けた祖父は、唐突に私たちに尋ねた。父が「お袋が寂しがっています。1度も夢に出てきてくれないと言っていました」と言うと、祖父は「(夢に出たら)何かあったんじゃないかと心配すると思って、出ない方がいいと思ったんだよ」と返してくれた。そして最後に「ずっとそばに座って見守っているよ今は苦しいこともなく元気でやってるから心配するなこれから先心配なことは何もないだから安心して下さい」と締めくくり、祖父は元の場所に帰っていった。

母方の祖父を降ろしてもらった時も、最初は定型文から始まり「生きていることが幸せだったでも自分が(家族の)重荷になっているんじゃないか沢山気を遣わせた自分のこと色々考えてくれてありがとう」と言われ、私も泣きそうになった。マキちゃんが「庭を綺麗にしたんだ。見てくれたかな?(植物の好きな祖父は生前、家の庭で様々な植物を育てていた)」と聞くと、祖父はフフッと笑い、「庭見たよ綺麗です」と返してくれた。

最後にイタコが「冥途の土産は何がよかろ念仏がよかろ閻魔大王様の・・・」とリズミカルなお経を唱え、口寄せは終了した。私たちは2人分の料金8000円を渡してお礼を言い、外に出た。雨はいつの間にか止んでいた。イタコの言うこと、8割くらいは同じだったよね、などと話しながら私たちは車に向かった。

結局、口寄せが本当なのか嘘なのかは、よく分からなかった。でもあの時間、私はたしかに忘れていた色んなことを、思い出していた。手術前、親戚一同が病室に集まると「仰々しいな」と笑いながらお見舞いのゼリーを食べる祖父、「この病院に手術させて大丈夫だったかな」としきりに心配する祖母、庭に出ると必ず「この花は何だ」クイズを出す祖父、そしてその様子を見ながら居間でお茶を入れて待つ祖母。本当とか嘘とかなんてことはどうでも良くて。イタコの存在は、「死んだ人を忘れられない、忘れたくない。でも、前に進んで生きていきたい」人たちへの、ほんのちょっとの希望なんだと思った。ただそれだけなんだ。だから、ここは私なんかが来る場所じゃなかった。あー、ごめん、ごめんイタコ。ごめんなさい。そういえばイタコのそばに龍角散の袋があったなあ。そうだよね、あれだけずっと喋ってたら、そりゃ喉も枯れるよね。

帰りの車の中、父が「親父がさっき『この病院で良かったのかな』て言ってたけど、今もお袋はそのこと気にしてるから、だからこのことは話さないでおこう」と言った。母はうん、と返し、私もそうだね、と言った。「おじいちゃん、おばあちゃんのこと『ばあさん』なんて言ってなかったよ」私が言うと、「いや、親父は言ってたよ、たまに」と父は返した。私はふぅんと呟いて、窓の外に目をやった。重たい雲の隙間から、太陽がこっちを向いていた。ギラギラと光ってた。

おわり

so fine

ソー
ファイン

Text & Painting Takazawa Satomi

1

新品ピカピカ
駐車場の奥にはお庭もあって綺麗な緑、植えたてのなんらかの木、壁はクリーム、玄関はすっきり落ち着いていて上品。
お隣の家の窓にはボロボロのぬいぐるみ勢がぎっちり見えているけれど、こちらは美しくってなにもない窓でですよ。カーテンじゃないの、ブラインドなの。
お隣との間に見える配管や通気口もずっとずっと綺麗。いまもまだ綺麗。このお家に上がった人はいるのかしら。ここにはどんな家族が住むのかしら。
お上品なんでしょうね。この辺りにラベンダーの匂いが漂えばいいですね。そうなればきっとここのお家も明るくなるんでしょうね。

2

「せっかくの季節」なのにいい植物はなく、水銀じみた色の湖畔には貸しボート屋だけがありました。二階の大窓からふと湖を見下ろした時、風で立った波を太陽が照りつけてそれはそれは綺麗なイルミネーション(速度の非常に速い)となっており、さらにくだらない植え方の木々の隙間から見えるそれらは恒久の点滅(非常に速度の速い)を繰り返しておりました。
外に出た頃にはそれらの気配は消え、ダンボールと同じ色の葦が無数にゆれていて、そのうるさいリズムはむしろこちらを静かにさせました。

10メートルないくらいの高さの建物が並んだ4車線の道路をゆっくり登って行きます。教会に警察署、簡易裁判所、体育館、小学校、消防署、郵便局。コンビニはないですね。
ゆっくりゆっくり歩いていると建物の高さは3メートルくらいになり、晴天だった空はだんだん白くなってゆきます。
視界が青白く染まる頃、ようく目を凝らすとだんだん見えてくるのが海なんです。それからたくさんの鳥がいますね。たくさんいる。みーんなカラスです。海の向こうにはなにもありません。ただここにとどまることしかできないんです。やっぱ寒いねーとか言って。ただただ座り込んでいます。

3

ダイエットとまではいかないけれどそれと似たようなことをしているので、人が【電車の中で】もの食べてるのを見ると吐き気しますね。耳元でじゃがりこされた時は倒れるかと思いました。ていうかこれってダイエットとは関係なく気持ち悪いもんじゃないですか？耳元で威勢の良い咀嚼音がするんですよ？ひっきりなしに続くんです。彼女のリズムで。ほらあのじゃがりこの、特有の。あれが売りなんだもんね。知らねーよそのリズム！・・・ああそうですか、そうですかすみません。別に電車の中でものを食べるなってんじゃないんですよ。

それとこれは昔からだけど菓子パンはゴミにしか見えないです。よくスーパーとかコンビニでワゴンにどっさり入って売られてたりするじゃないですか。あのパンが入ってるあの袋の中には多分優しい空気が入ってるんだろうとは思いますが、84円とかで並べられもせずどっさり売られてたりすると「わあゴミだ」っと思います。わたしが全部買い取って捨ててあげてもいい。燃やしてあげたいああそうそうコンビニのレジの脇の素甘とおはぎと栗まんじゅうもね。

カロリーメイトとかクリーム玄米ブラン、それから一本満足etcあいつらは一体何なんでしょうね(完全食ヅラが過ぎませんか？必要あるはずがないじゃない。ああそうですか、そうですね、すみません。

4

なんとなく帰るのがめんどくさくて、自宅への角を曲がらずに知らない道へ進みます。
物腰の柔らかい住宅街を自転車でゆっくり走ってゆくと4、5年前に住んでいたあの家のことを思い出しました。
あの家に住んでいた頃は明け方に帰ることが多くて、濁った朝焼けの向こうに見えるゴミ処理場の煙突が綺麗だったことを覚えています。あそこから出ている煙は夏の早朝の肌寒さを助長しているはずで、早くこのドアを開けて風呂には入らずさっさと寝てしまいたいと思わせるけれど、でもこのまま寝ちゃうと数時間後の授業は見送ることになりそうだなーなんてことを考えながらしばらく(と言っても30秒程度なんだろうな)二階の手すりから眺めていましたね。
結局風呂に入って布団に入るも当たりのきつい朝日にいらいらして眠れずに今日のあの人らとの会話を反芻して、恥ずかしくて悲しくなって気がついたらまたアルバイトの時間になっていましたね。

5

ミステリー小説

今田 健太郎

後輩の水野に小説を借りた。

その小説は「ミステリー小説」と呼ぶそうだ。

ともかく、ありがたくも1ページ目に登場人物の一覧がある。

中村、清水、畠山、富田、松橋……

清水が怪しい。

ふだんビジネス書しか読まないため小説には苦手意識があったが、その「ミステリー小説」はスポーツドリンクのようにごくごく読めた。事件が起きたのは87ページ目だった。人が死んだ。案の定、清水にはアリバイがなかった。

やはり清水が怪しい。

288ページ目で探偵が事件を解決した。犯人は富田だった。親の代までさかのぼる恨みが動機であり、犯行の経緯を語る富田は泣いていた。登場人物全員が泣いていた。運命という一言では片付かない人間ドラマがそこにあった。

それはそうと、清水が怪しい。

やがて321ページ目で物語が終わり、本を閉じた。

存在しない332ページ目で、清水がニヤリと笑っている気がした。

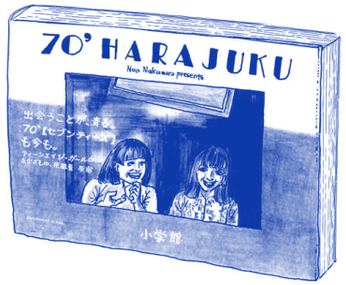
illustration by fumiko koshiba

RECOMMEND レコメンド

THEME「東京」

チーム夜営のメンバーが共通のテーマを
設けてオススメの映画や書籍を紹介します。
第二回のテーマは「東京」です。

写真

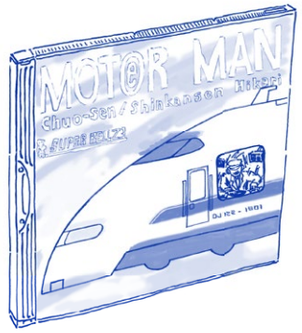


「70' HARAJUKU」中村のん

若者文化をリードし続ける、東京の代名詞とも言える街の1つ、原宿。そんな街のルーツを皆さんはご存知だろうか。日本のスタイリストの草分け的存在の高橋靖子氏と、世界で活躍した伝説的モデル山口小夜子氏… 2人の笑顔が表紙を飾るこの写真集には、原宿の黎明期の風景が詰まっている。馴染みの店に集う若き日の錚々たる顔ぶれには明日への希望が垣間見え、この時代を謳歌する人々への羨ましさを感じざるをえない。今なお健在の建造物と照らし合わせながら、東京カルチャーの原風景に思いを馳せてみてはいかがだろうか。

音響アシスタント：吉谷彰彦

音楽



「MOTOR MAN 中央線ノンストップ特快Mix」SUPER BELL"Z

10代の頃に鉄道好きの兄の影響で聴き始めた SUPERBELL"Z。テクノと鉄道ネタを融合させるユニークなバンドだ。東京の駅は彼等の曲で覚えたと言っても過言ではない。兄はとうの昔に飽きたようだが、僕は今でも彼等のグルーヴに身を委ね、部屋で体を揺らしている。京浜東北線が舞台の『秋葉原 - 南浦和』が（比較的）有名だが、ここでは秋葉原から八王子に向かうこの曲をお勧めしたい。小ネタや音楽的変化が少ないため、ダンス音楽志向が強く、鉄道やコミックバンドに興味がない方でも十分楽しめると思う。

音響：飯塚大周

書籍

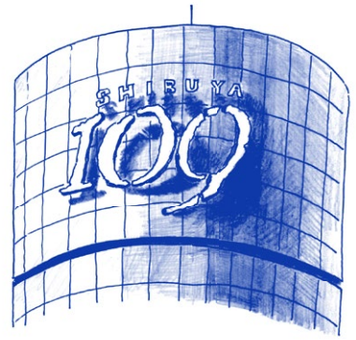


「凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩」皆川典久

東京は坂の都であるらしい。港区には名前のついた坂が80以上あり、渋谷、四谷、世田谷などなど勾配を想起させる地名も多い。関東ローム層からなる柔らかな平野が河川に削られ谷となった地形の、坂と坂とが向かい合う様をスリバチ地形と名付け、観察し考察しその成り立ちに思いを馳せ、愛でる。そんなスリバチ愛好家たちが送る、地理から読み解く東京お散歩ガイド。普段気にも留めない近所の坂にも笑っちゃうくらい壮大な地球規模のエネルギーと歴史が秘められている…のかもしれない。

映像：内田圭

建築



「SHIBUYA109」

今更渋谷109？と思いつつ、意外と今行ってみると面白いのでオススメ。2017年に新設されたゴリゴリなファンシー感満載の7階プリクラコーナー「モレルミニョン」（名前ですでに盛れる気満々なのがいい）は一見の価値あり。新しいのか古いのか、ビル全体に漂う絶妙な狭間感。現在、創業当時からのロゴを刷新するべく募集中とのこと。ちなみに私は7階のパスタ屋でバイトをしています。レジで「夜鍋見ました」と言ってもらえると、お会計からなんと100円割引したいけど、そういうのはないです。

演出：萩原優奈

書籍



「アースダイバー」中沢新一

自分は町田市育ちなので、いまいち東京民の実感がない。他県の人が持つ無機質な都会のイメージを自分も東京に対して抱いていたように思う。新宿・渋谷・赤坂・銀座・上野…どの町であろうが行ったことない都心部は一緒くたに都会。無。この本はそんな東京の代表的な町を、縄文人の視点で以って練り歩く。その町が土地としてどんなパワーを秘めていて、どのような人々が集まるのかを解説してくれる。無のイメージだった東京の街が泥臭い個性を見せ始める様相が楽しい。地層に潜るように土地を観ていくアースダイバー。因みに町田は載っていない。やはり町田は東京ではないのか。

役者：山川恭平

WEB



「東京タヌキ探検隊！」宮本拓海

東京で犬でも猫でもない動物を見かけたら、東京タヌキ探検隊！へ。分かりやすいイラスト解説で、自分が目撃した生き物がタヌキかそうでないかを見分け、隊長の動物ジャーナリスト宮本先生に情報を提供してください。隊長は、東京23区に生息している500〜1000頭（推定）のタヌキをそっと見守り、人間とタヌキが共存できる環境を守るための調査活動をされています。目撃情報を提供することで、東京タヌキビッグデータ作りに一役買えるなんて、なんて夢のある活動なんでしょう。応援しています。あとタヌキかわいい。http://tokyotanuki.jp/

MU

小説



「ディレイ・エフェクト」宮内悠介

2019年、東京。昭和十九年の戦時下の風景が半透明に現在と重なり合って再生される超常現象が発生する。「わたし」の家では7歳の半透明な祖母が毎朝玄米を瓶搗きする音が響き、街中で戦時下の暮らしが観察できるようになる。やがて東京大空襲の瞬間が近づき家族は疎開するが、わたしは一人東京に残ってその時を目撃する。過去が現在に重なるアイデアを駆使した短編。もっとディティールを読んでみたくもなるが、余白は読者に任され想像力を刺激される。重なり合う都市というテーマで共通するチャイナ・ミエヴィル「都市と都市」もオススメです。

脚本：大竹竜平

漫画



「ホムンクルス」山本英夫

人間の生や業の描写に特化した作者の、抑圧した深層意識とその解放に焦点を当てた作品。他人のコンプレックスが「ホムンクルス」と名付けた異形の姿で見えるようになった主人公は、街に溢れるホムンクルスたちの抑圧された意識を解放していくが、その果てに自身のコンプレックスとも向き合うことになり、最終的に自身と街という構図で対峙することになる。トラウマやコンプレックスを異形化という方法で表現するのは漫画ならではであり、その描写も非常に気持ち悪く、わかりやすい。同じく狂気に溢れた前作「殺し屋1」もロマンティックで超オススメ。

演出：小林弘樹

illustration 山川恭平

YONABE Vol.2
掲載作家紹介
(掲載順に記載)

にじんだページ / 袋田くん / ヒロ子の広い空
指先4章 / ミステリー小説

P.3 - 4, 9 - 10, 17 - 18, 27 - 28, 39 - 40

今田健太郎 [脚本家・演出家・俳優]

1986年生まれ。所属劇団トリコロールケーキで脚本・演出・出演・音楽を務めるかたわら、家でじっとしている。辞世の句が字余りになるタイプ。そのほか個人としての活動に、コントユニット・テニスコートへの参加／コラム連載／CM出演など。
トリコロールケーキ : toricoro.com
Twitter : twitter.com/1mada

小林峻也のケバブ食べ歩きへ
ようこそ in Berlin

P 05 - 06

小林峻也 [舞台美術家]

1990年生まれ。2013年武蔵野美術大学空間演出 デザイン学科卒業。2012年からチーム夜営の舞台美術を担当。2017年よりベルリン工科大学大学院 に在学中。
HP : takayakobayashi.com

変

P 07 - 08

萩原優奈 [演出家・俳優]

1993年生まれ。2017年武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業。同大学内で在学中に設立、企画されたオリジナル・ミュージカル団体 CAMPにて、2015年に第2回公演『パラダイス』で初めての主催・脚本・演出を務める。チーム夜営にはvol.3『タイトルはご自由に。』で制作として初参加、vol.4『衛星の兄弟』では役者を務める。2017年に大学の卒業制作として演劇パフォーマンス作品『水槽の中の魚たち』を発表。同年から舞台作品の宣伝美術も手がける。
HP : hy-notice-it.themedia.jp/

フライデーナイト

P 11 - 16

工藤愁子 [照明]

1995年生まれ。兵庫県出身。大阪芸術大学短期大学部舞台制作コース卒業。上京し、東京の居酒屋にデフォルトでホッピーが置いてある事に感動する。昨年2017年阿部はりか氏主催の舞台『あおみのことづて』照明を担当させてもらう。
instagram : instagram.com/shk003/

OMIYAGE MUSIC!!

P 19 - 22

飯塚大周 [サウンドデザイナー・プログラマ・俳優・文筆家・舞台装置製作]

1992年生まれ。神奈川県出身。高校時代から演劇を開始。2010年より武蔵野美術大学の演劇サークル『劇団むさび』等で主に役者として活動。また在学中に独学でプログラミングと音楽とドローイングを気合で始める。卒業後も大道具製作やプログラマの仕事をしつつ、バンド、舞台美術、俳優の活動を地味ながらも行っている。今後はもっと行うだろうといわれている。自分一人から。トイレとかで。
SoundCloud: soundcloud.com/user-451722743
Pixiv: pixiv.net/member.php?id=30733021

☒を失くして。

P 23 - 26

大竹竜平 [グラフィックデザイナー ・脚本家]

1988年生まれ。デザイナー。
チーム夜営では脚本と宣伝美術を担当。
HP : ryuhei-otake.com

イタコごめん

P 29 - 36

鶴田理紗 [俳優]

1993年生まれ。2014年より劇団「白昼夢」所属。2015年日本大学藝術学部演劇学科　演技コース卒業。近年の出演作は、白昼夢『麒麟大天覧』、ジエン社『物の所有を学ぶ庭』、日本のラジオ『ツヤマジケン』など。2018年より、作家・イヌビエと共にユニット「私は少し静かにしてるね」を結成。
HP : risa-tsuruta.tumblr.com

so fine

P 37 - 38

高澤聡美 [アーティスト・俳優]

1991年生まれ。2011年より四方謙一氏に師事。アーティスト活動を行うほか、演者として多数の舞台・映像作品に参加。近年の出演作はトリコロールケーキ『モグララ』、『誰がいつ泣くの』、マシュマロウェーブ『ブランチ』、『オセ』、神蔵美子監督作品『雪子の部屋』。チーム夜営ではVol.3『タイトルはご自由に。』、vol.4『衛星の兄弟』、vol.5『記憶の人、』に出演。
HP : satomzawa.tumblr.com/top

RECOMMEND イラスト

P 41 - 42

山川恭平【俳優・イラストレーター】

1989年生まれ。2013年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。在学中に演劇活動を開始し、現在では小劇場を中心に活動中。童貞下ネタコメディーユニットPeachboysの一員。同ユニットではKYOKYOと名乗る。近年の出演作は劇団竹『人形を殺す』、はらぺこペンギン！『不思議の国でノックアウト』、BASEプロデュース『まるでデジャヴな眠り姫』、鬼の居ぬ間に『人魚ー死せる花嫁ー』、Peachboys　童貞SF銀河系ラブサスペンス『君のナニは。～宇宙穴兄弟～』。チーム夜営には『そのつぎ』では役者　として、『yとxの事情』では演出助手として参加。
Twitter:@higekaaaaan